協会創立40周年 記念投稿「私と保険医協会」

喜びも苦しみも幾年月

玉川和隆（城東区）

〝喜びも悲しみも幾年月〟は映画の題名であるが、それに模していえば私の協会での40年は〝喜びも苦しみも幾年月〟とでも言えようか。

協会の組織づくりを始めた初期、その推進力となる役員会である幹事会を月1回開いていた。出席して待つことしばし誰一人来ない。細長い木のイスに寝そべって待つも、誰も来ないことが二度あった。生みの苦しみとでも言うべき時を思い出す。

協会設立前後は、一時的にもてはやされた〝モダン歯科医療〟は国民医療要求に押された国民皆保険制度、また社会経済の変化により潮目が大きく変わることになる。その変化を捉えた協会の方針と活動スタイルは、またたく間に前進を始めた。時には年間300人を超える入会者を迎え入れることもあった。

思い出の中に輝いている光景がある。〝躍進胸に130人が集う〟。会員数1340人で迎えた創立10周年記念式典・レセプションである。1980年11月22日、中津アーバンホテルにて大阪府歯科医師会・筆本新一会長、大阪府保険医協会・桑原康則理事長、保険医協同組合・稲次直己理事長等のあいさつに続いて、終盤国会の多忙な中を駆けつけた国会議員・井岡大治（社）、四ツ谷光子（共）、中馬弘毅夫人（新自由）、沓脱タケ子（共）等のあいさつが続いた。協会の輝かしい歴史の1ページであり、私の生涯での忘れがたい1シーンでもあった。

喜びも苦しみも乗り越えて40年を歩んできたことになる。3850人の大阪府歯科保険医協会の40年を迎えることが出来たのは望外の喜びである。

存在がありがたい

小山榮三（枚方市）

NHKのETV特集（7月3日放送）で、作家・大江健三郎氏と第五福竜丸の乗組員だった大石又七氏の核をめぐる対談を見た。マーシャル諸島でアメリカの水爆実験の被害を受けた第5福竜丸の乗組員23人のうち、半数以上が内部被曝で亡くなっている。当時、アメリカは原子力の平和利用を国連で主張していた。しかし、その裏では米・ソの核実験競争が行われていた。

第五福竜丸事件は、その事実を世界に知らしめる大きな事件であった。マグロにも放射能汚染が広がり、反核運動に火が付いた。日本では署名が全国民の3分の1にまで広がった。革新勢力は大きく国民に根を下ろしていた。アメリカはこれを恐れて、対日工作を始めた。

当時のアメリカ高官は、「日本人は新聞をよく読み、それを信じて行動する国民だから、マスコミ対策せよ」と述べている。正力松太郎氏や財界はその意を汲んで、それ以後、政治の右傾化にマスコミを活用し、原子力の平和利用も大宣伝してきた。原子力がなくては生活できないという世論をつくり、お金のほうが人間の命より大切だという世論がつくられていった。

今年は協会40周年である。『40周年記念誌』にぜひ書いておかなければならないことを書くことができた。「歯科医療を取り巻く流れ」で協会創立から今日までの政治的な背景について書いた。課題や闘いは、年代ごとに全力で取り組んできた歴史を記述した。時々の政治に流されない勢力が日本に存在する重要性を改めて認識した。私は歯科医にとって、協会が存在することがありがたいことであると、しみじみ思っている。

協会の40周年に思う

伊津進弘（八尾市）

「八尾に西武百貨店が来る。これから間違いなく発展する地域だ」というわさを信じ、1981年八尾市で開業した。開業当時、歯科医師会とひと悶着あり、厳しい船出となった。暑い夏の開業で来院患者数も期待できなかったが、幸いにも最初の月は168枚のレセプトがあった。その後、順調に枚数は増加し、同年の終わりには208枚になったが、開業時の出費が多額で経営は厳しかった。

協会の当時の慣わしだったのだろう、理事と事務局員の2人が新規開業の私の診療所を訪れた。理事は同窓の岩名先生、事務局員は田野氏であった。「歯科協会は保険と税に特に力を入れ、保険開業医の経営の手助けをしている。休業保障制度も整っている」と勧められた。歯科医師会にはあまり良い印象を抱いていないので、困ったときに何かの役に立つだろうと応じた。この選択は間違っていなかった。

当時の若い歯科医師は将来に明るい展望を持っていた。歯科医療はますます成長していくものだと考えていた。そのため可能な限り、医院経営に金をつぎ込み、医療の質を上げ、診療所環境を整え、来院患者の増加を目指した。しかし、これが幻想だと気付かされるのに、たいした時間は必要でなかった。当時、臨調行革が進められた。その結果、社会保障の削減が行われ歯科医療の需要が急速にしぼみ、歯科医療は長い「冬の時代」に突入した。

「地域社会に貢献する歯科開業医は共存共栄でなくてはならない」と、経験を積んだ初老の歯科医師がつぶやいていたが、私はご託宣のように聞き流した。今でも変わらないが、他院より多くの患者獲得のために競争に精を出すのが若い歯科医師だ。当時、私もそれを信じ邁進していた。

30年たった今、レセプト枚数は開業当時よりも少なくなった。地域社会との共存共栄の道を探すことが歯科開業医の最良の道であったように思う。このことは協会も教えてくれていたのだが、少し遅きに失した感がある。

7人の侍〜茨木組

永田悦夫（茨木市）

思い出せば1967年のことだ。初めて歯科が税務署の重点業種となり、厳しい徴税が始まった。急きょ、臨時総会が開かれ、「修正申告は10%で」と伝えられた。

私は前年開業したばかりで、自費診療はほとんどなく払えなかった。

おそるおそる手を挙げ「とても払えないので税務署に相談したい。一緒に行かれる方があれば、今晩、私の診療所にお越しください」と言った。思いがけず、満員になった。翌日、再度、総会が開かれ、竹下哲夫支部長は「私は皆様によかれと思って税務署の取引に応じたが、これは間違いだった」と謝られた。私は竹下先生の人柄に感銘を受けた。当時、新入りの言葉を受け止める幹部はいなかった。

私はテープレコーダーを持って、近所の高浜悦子先生と税務署に行った。

署員は座るや否や「そんな物を持ち込んでは話はできない」と顔を背けた。私は「人に聞かれて困ることを話すのですか。そんなつもりじゃなかった」と言ったが、話はできず修正申告はしなかった。結局、修正申告しなかったのは私たち2人だけだった。

高浜先生には懇意にしていただいたが、ある時、「先生は一体、やる気があるの、ないの」と爆弾を落とされた。私は、協会運動には熱心でなかった。十分な修練なしに開業した私は、1日も早く人並みの腕になりたく、研修に走り回った。患者さんがあふれ、日に14時間も働いたが、保険で良心的診療はできない現実だった。何としてでも「保険で良い医療」を教えられたのが「7人の侍」の茨木組（竹下哲夫、高浜悦子、鈴木宏一、森田総一）のおかげだった。